嫁・佳奈子は今夜も義父に犯される

青空白雲
表紙イラスト：ねいさん

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『嫁・佳奈子は今夜も義父に犯される』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

嫁・佳奈子は今夜も義父に犯される

青空白雲
表紙／ねいさん

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

あさいかなこ
浅井佳奈子

真面目で貞淑な妻。最近夫と距離を感じ、その寂しさから万引きをしてしまう。

あさいこうぞう
浅井幸三

佳奈子の義父。表向きは真面目だが、しばしば佳奈子にいやらしい視線を向ける。

「すいませんでした……。本当に申し訳ございません」
浅井佳奈子(あさいかなこ)は頭をさげ、唇を噛みしめた。深い漆黒のロングヘアが音もなく肩を滑りおち、ひと房胸元に垂れていく。閉ざされた瞼、まつ毛が揺れて、目元に薄い影が揺れている。
「すいませんで済んだら警察はいらんのですよ。全く何を考えているのかねえ」
中年の、頭の薄くなりかけた保安員が渋面を作った。口に咥えた煙草から紫煙が揺らめいている。
「多いんですよね。ほんの出来心で、とか、つい魔が差したとかね。そんなことで万引きされたら、お店のほうもやっていけませんよ。少なくとも、歯磨き粉ひとつ盗まれたら、みっつよっつは売らないと元が取れないんですからね」
テーブルに置かれた歯磨き粉を見て、保安員は口元を歪めた。
――なんと馬鹿なことをしてしまったのだろう……。
悔やんでも悔やみきれない。ロング丈のレモン色のスカートの上で手を握りしめた。
近所のスーパーだった。いつも食材や生活用品の買い出しのため、利用していた。今日も、野菜類と豚肉を買うため、訪れたのだが、いつの間にか、万引きしてしまったのだ。
原因は夫との間で持ち上がったお金の問題。外資系製薬会社に勤務する夫の給料は高い。しかし、夫には金づかいが荒いところがあり、生活費もあまり家に入れてくれない。
「――お金お金というけどな、こっちだって付き合いでお金がいるんだ」

ゆうべの夫の言葉が甦る。夫は、ビール瓶をグラスに傾け、面倒くさそうに佳奈子を見た。
「――昨日はS大医学部附属病院の外科部長相手に接待だった。全部こっち持ちさ。もちろん、経費はある程度会社が出すけどな、俺が一部出すときもある。そのあと同僚と飲みにいくと、やっぱり必要になるんだ」
うなだれる妻に、夫はたたみかけた。
「――生活費のやりくりは妻の役目だろう。こっちだって、一銭もやっていないわけじゃないんだ。十万もあれば余裕だろう」
将来の貯金のこと、子供ができたときの養育費のことも口にしたが、それ以上夫は取り合わず、ニュースを見るだけだった。
(あのひとにもっと理解があったら……。ううん、あのひとのせいじゃないわ。わたしがいけないのよ)
うつむく佳奈子に、保安員が声をかけた。
「とにかく、今回は警察に通報するのはやめておきましょう。もうすぐお義父さんでしたか、来ると思いますから」
佳奈子は唇を噛みしめた。義父のことを思うと、なお一層暗い気分になる。
しばらくして、義父が部屋に駆け込んできた。
「佳奈子さんっ。あんた、なんてことをっ……」

「お、お義父さん……。すいません。本当にすいません。ごめんなさい……」
パイプ椅子から立ち上がり、佳奈子は何度も頭を下げた。
義父はまさに顔面蒼白といった様子である。
「お義父さまですか。今回はお嫁さんが大変なことを致しましてねえ。いや、これひとつ盗んだだけなんですがね。お嫁さんはこのお店の常連さんということで、店長も驚いていたんですよ」
保安員は皮肉っぽく口を歪めて言葉を続けた。
「店員さんもがっかりしておるところです。まさか、浅井の奥さんがこんなことを……とね」
「誠にすいませんでした。私の監督不行き届きです。家に帰ったらきちんと注意しますから、警察には……」
薄くなった頭を下げ、枯れ枝のような身体を縮めさせる義父。長年勤めた信用金庫を昨年辞め、今は盆栽いじりと俳句だけが楽しみな義父だった。
しかし、義父には申し訳ないという気持ちはなぜかあまりない。他人には好々爺で通っている義父だが、家にふたりでいると、なんともいえない不気味な視線を感じることがある。ねちっこい、脂ぎった眼差しを、胸やお尻に覚えることが多々あった。
（お義父さんに知られてしまうなんて……）

不吉なものを感じ、唇をぷるぷる震わせる。

「もう二度とこういうことがないようにして下さいよ」

保安員の冷たい言葉を背に、ふたりはスーパーをあとにした。

東京西部の都市郊外に義父・浅井幸三（こうぞう）の自宅はあった。幸三の息子である幸彦（ゆきひこ）と佳奈子夫婦は近所に住んでおり、佳奈子がしばしば義父の世話をしにやってくる。義父の世話も大変であるが、義母が五年前に他界しており、仕方のない部分もある。どうしても、食事がおろそかになりがちだからだ。

（困ったわ……。これからどうなるのかしら）

佳奈子は幸三に冷たいお茶を出し、ソファに腰を下ろした。六月も半ば、梅雨の季節だが、今日は快晴で、暑いくらいである。佳奈子はU字形の襟を持つライトブルーのTシャツに、レモン色のスカートという格好だった。

現在二十五歳の佳奈子は、女子大生時代、準ミスキャンパスに選ばれたほどの美女だった。身長は高く、百六十七センチはある。髪は長く、背中にまで流れている。前髪を斜めに流したその下には、卵形の愛らしいマスク。全体に童顔ぎみだろうか、細い眉の下にはつぶらで和やかな雰囲気を持つ大きな瞳。二重瞼に飾られ、長いまつ毛が伸びている。鼻筋はすっきり通り、優しい形をした小鼻を備えて、高い鼻の頭を形成している。唇はぽっ

てりして、薄くパールピンクのルージュを塗った今は、濡れたように艶やか。
英字新聞模様のプリントがされたTシャツを、ふたつの胸小山が押しあげている。自分でも、大きすぎると感じるバストサイズはGカップ、94センチ。
ウェストはきゅ、と引き締まり、60センチほど、ヒップはこれまた豊かで、自分では大きすぎると密かにコンプレックスの種になっている。下品なほどに豊かにできあがってしまっていると。サイズは95センチはあろうか。最近は測ったこともないから、正確な数字は分からない。
「ふう……。一体どうしてこんなことをしたんだね？」
義父の濁った眼に、佳奈子の肩が縮む。
「今日は私に恥をかかせてくれたね。いやあ、こんなことは六十五年生きていて初めてだよ」
冷えた緑茶を一杯飲みほし、幸三は息子の嫁を見た。暗灰色の目がねっとりと佳奈子の身体を撫でていく。ゾク、と背筋に寒気が走った。
白髪混じりの髪はだいぶ薄く、額はテカテカ光っている。細い眉に、腫れぼったい瞼、目は少し濁っていて垂れ目。目の下には隈ができている。頬はこけ、口元には皺がいくつも刻まれている。背は佳奈子からすればだいぶ低く、並んで立つと、佳奈子の肩くらいに義父の頭が来る。痩身で、着替えているところを見たことがあるが、あばら骨が浮いて見

えそうな薄い胸をしていた。
「すいません。わたしもどうかしていました……」
「どうやって謝罪するつもりかね？」
義父の冷たい眼差しに、佳奈子は息を飲んだ。相当怒っているようだ。
「なんでもわたしにできることならさせていただきます」
「そうか。ならば、胸を揉ませてもらおうか」
顔をあげ、佳奈子は目を丸く見開いた。今耳にした言葉が信じられない。普段からねちねちといやらしい視線を向けてくることが多かった義父だが、まさか、実際にセクハラをしかけてくるとは。
（わたしの万引きを脅迫のネタにするつもりかしら。ああ、なんて恐ろしいひとなの）
沈黙する息子の嫁の顔を覗きこむ。
「ん？　いやだと言うのかね？　ならば、幸彦に万引きのことを話してやらねばいかんかな」
義父は口元を歪めた。
義父の視線がさらに粘っこくなり、ゾク、とした。乾いた唇が開き、唾液を滴らせた舌が唇を舐める。佳奈子の太腿が震えた。
「そうか。ええと、幸彦の番号は……」

ズボンポケットから携帯を取り出し、ボタン操作しようとした幸三に、佳奈子は慌てて声をあげた。
「やめて下さいっ。お義父さん、言うことを聞きますから。だから、あのひとにだけは――」
「ふふん。ようやく素直になったかね。さあ、こっちに来なさい。普段もてあましぎみなそのおっぱいを存分にかわいがってくれよう」
義父はにやにやと笑い、舌舐めずりした。
(お義父さんがまさかこんなことを要求してくるなんて……。わたしは幸彦さんの妻なのに。正気なの……?)
息子の妻への度を越えたセクハラに、悲しみが突き上がる。瞳が潤みそうになるのを堪え、移動する。義父は相変わらず、ねちっこい視線を浴びせてくる。老人の欲情に濡れた眼差しに、寒気がする。うるさいくらいに心臓の鼓動が鳴っている。おずおずと義父の隣に腰を下ろした。
「ふふ。さすがにGカップのおっぱいは大きいなあ。揉みごたえがありそうだ」
「な、なんでサイズのことを……」
「そんなことくらい、とっくの昔にお見通しだ。佳奈子さんのことはなんでも知っておきたいからな」

義父は口を開けて笑う。上の前歯が何本か欠けており、下の歯は黄ばんでヤニ臭い。ふわあ、と義父の口から漏れる口臭はきつい。生モノを何日も外に置いておいて腐りかかったような悪臭。ゴミの匂いに近いと言ってもいい。その歯の向こう側で、赤紫舌がゆらゆらしているのがまたおぞましい。

（わたしの下着でもいじったのかしら……。まさか、こんなひとだったなんて）

たまに、佳奈子はこの家に泊まることもあった。週に一回か二回程度だが、そのときにはもちろんお風呂を借りる。義父はその間に調べたのかもしれない。

義父が手を伸ばしてきた。両手の十本指が豊かな毬のような胸双丘に触れる。

「ほほお。随分柔らかいじゃないか。いやあ、素晴らしいな。幸彦には揉んでもらっているのか？　ん？　どうだね、佳奈子さん」

「う、うう、知りません」

節くれだった指がもぞもぞ動くのに、胸の底から嫌悪感・汚辱感がこみあげてくる。

やがて、義父の指に力がこもり、胸丘に食い込んでくる。痛みはあまりないが、触れられているだけで、鳥肌が立ちそうだ。

（義理の娘にこんなことをするなんて、正気の沙汰じゃないわ。裏切られたのね……）

下唇を噛みしめ、顔をそむけ、佳奈子は後悔の念にさいなまれた。眉がたわみ、眉間に薄く縦皺が刻まれ、小鼻が膨らむ。ぷるぷる震えるためか、髪の毛が一本二本揺れて肩を

撫で、胸元に垂れてくる。
（気持ち悪い。ああ、早く終わって！　いたずらはやめて……）
嫌悪に震えていると、義父は顔をさらに近づけ、生ゴミにも似た口臭をこもらせた息を吐きながら訊いてきた。
「幸彦の奴とは週何回だ？　一回か、二回か」
「な、なんてことを訊くんですか。そんなこと、答えられるはずありません」
禿げあがった前頭部と額に横皺が数条刻まれ、汗の玉がいくつか溜まっている。加齢臭だろうか、枯れ草のような匂いがする。よく見れば、白髪混じりの髪に小さなフケ。耳にも耳垢が少し張りついている。
（顔をそんなに近づけないで。もっと離れて下さい……）
夫とは回数は多くはない。製薬会社の研究員である夫は帰りが遅いので、帰るとすぐに眠ってしまうから。
「どうなんだい。答えないなら、じかに胸をもませてもらおうかな」
義父の手がTシャツの裾にかかった。
「言いますっ。言いますからやめて下さい」
眉をたわめ、瞳を潤ませて、佳奈子は小さく叫んだ。夫の実父によるわいせつ行為に、悲しみと絶望が身体を強張らせる。

「つ、月二、三回……です」
「ほう。そうか。寂しいじゃないか。佳奈子さんはまだ二十五だろう？　夜は身体が疼いてしょうがないんじゃないか？」
あまりに破廉恥な言葉に頬が真っ赤になる。今すぐにでも、どこかへ消えてしまいたい。しかし、万引きの件をバラされたら、という恐怖が佳奈子を押しとどめた。最近はすれ違いが続いているのだから、さらに夫婦関係が悪化する可能性もある。
義父はニタニタ笑いながら、涎もこぼさんばかりの表情で、胸半球をふたつ、揉みまわす。上に下に、右に左に。たっぷりとした、マスクメロンサイズの半球肉が寄り添い、シャツの襟もとから深く刻まれた谷間が覗く。
「ふぅ……。佳奈子さんはいい匂いがするねぇ。どんな香水を使っているんだね？」
「普通の、デパートで買ったもの、です。……ん、んうう」
義父の顔がなおさら近づき、息子の嫁の首筋に鼻面を寄せる。ふーふー、むふー、ぶふうー。荒い鼻息に、ゾゾッと背筋が冷たくなっていく。脚が強張り、石になったかのように動かない。生温かな息が首筋に弾み、気味が悪くて仕方がない。
（いや、息がかかって気味悪いっ……。そんなにくっつかないでぇ）
今の彼女の首からは、ムスクのおとなっぽい匂いが溢れているはず。その匂いに酔いしれているのだろう。

「お、お義父さん。もういいでしょう。もうおしまいです。放して下さい」
身をよじりながら、唇を震わせる。ぷるるん……と薄いシャツ越しに、豊かなメロン乳が揺れる。いつの間にか、恥ずかしいことに、シャツをふたつの乳首が突き上げていた。自分でも乳首の大きさは気にしているだけに、穴があったら入りたいほどだった。
そして、二十五歳の肉体に変化が徐々に現れはじめる。
(うそ、うそでしょう。身体が……熱いっ。熱くてジンジンする)
義父の手の動きとともに、シャツが擦れ、乳首がブラジャー内で勃起(ぼっき)していき、疼く。夫に触れられていなかったせいだろうか。
(いやっ。わたしはそんな女じゃないわ。間違いよ。絶対に何かの間違い……)
「ふうぅ……。もう少し、もう少しだ」
義父が顔を巨乳にあててきた。
「きゃあああっ。やめてぇっ」
つい、義父を突き放していた。六十五歳の細身はソファの上でひっくりかえってしまう。
「す、すいません、お義父さん。大丈夫ですか?」
幸三は一瞬、怒りをあらわにしたが、「ふん」と鼻を鳴らし、立ちあがってリビングをあとにした。
佳奈子は「ああ……」と嘆き混じりのため息を漏らし、床に座り込んだ。胸にいつまで

も義父の指の感触が残って、気持ち悪かった。
（万引きなんかしたから、こんなことになってしまったんだわ。自分で自分がいやになる……。お義父さんもあんなに変わってしまうなんて。息子の妻の胸を揉むなんて……。そんなひとだったとは思わなかったわ）
涙をひと雫こぼしながら、佳奈子はぎゅ、と自分の身体を抱きしめた。

「お前とこうして食べるなんて久しぶりだな」
幸三が声を弾ませた。
「最近は忙しくてね。たまに大学にも顔を出しているんだ。先生にいろいろ質問したりして」
幸彦が父親のグラスにビールを注いでいる。
日曜日の夜、自宅のリビングで親子は杯を交わしている。月に一回くらいは、幸彦は父の家に行く。そんな様子をキッチンから眺めながら、佳奈子は不思議に思う。あのときの義父は別人だったのではないかと。今の義父は優しく穏やかな老人そのものである。息子の嫁が万引きをした、そのことにつけいり、卑劣なセクハラ行為をするようには思えない。
きゅうりとキャベツの浅漬けと烏賊の塩辛を持ち、リビングへ。幸彦の隣に座る。
「お前も飲んだらどうだ？」

「そうだ、佳奈子さん。一杯くらい付き合いなさい。こんな日は珍しいんだから」
義父が目を細め、口をほころばせて、息子の嫁を眺める。
「はい、では……」
グラスにビールを受け、ひと口飲む。ほろ苦い味わいに、かあ、と頬が火照る。
「で、どうなんだ、研究のほうは」
塩辛に箸を伸ばしながら、幸三が息子に視線を戻す。
「うーん。なかなか難しいよ。もう百回は実験を繰り返しているかな。それでもまだまだなんだ。開発まで先が長いね」
「マウスを使って実験しているのか」
「ああ、そうだよ。マウスも高いからね。下手な実験は繰り返せない」
うなずきながらグラスを傾けていると、ふと膝に足の感触を覚えた。は、とした。義父が足を伸ばしてつついているのだ。
「身体を気遣わないといかんぞ。ちゃんと寝ているのか」
などと会話をしながら、義父の足はさらに不埒な動きを表す。息子の嫁の下腹部へと伸びていく。佳奈子は顔をしかめながら、腰をよじったが、義父の足はしつこく追いかけてくる。
（いや、お義父さん。やめて下さいっ）

まさか、ここまで要求するとは……。これはもはや、犯罪ではないか。

「あなた、ごめんなさい。こうするしかないの……」

胸の底の底までが冷えていくような感覚に見舞われながら、佳奈子はおずおずと両手十本の指で老幹を包み込んでいく。お金のことなど、すれ違うことも多いが、やはり、夫を愛している。なのに、その夫をあろうことか、義父のわいせつ行為に身をゆだねて裏切ろうとしている。

（あ、ああ、温かい……。これがお義父さんのなの……。信じられない。ああ、何を考えているの、わたしは。さっさと出せばいいのよ。そうすれば、今日のところは解放されるわ）

とにかく今は、フェラチオをするしかない。年寄りなのだから、二回も出せるはずはないのだから。

身体を前かがみにしていく。たぷん……と双子巨乳が小さく揺れた。胸乳渓谷に落ちた濃い影がスイングする。木苺乳首が掛け布団に擦れて、舐め、吸われた余韻もあってか、痛痒かった。

（臭い。なんて匂いなの。男臭くてすごい）

むわ、と鼻先に漂うのは、烏賊臭と酸味臭。烏賊臭はかなり強烈（きょうれつ）で、鼻腔粘膜に染みこみ、ぴりぴり痺れるほど。吸えば吸うほど、理性が麻痺していく。酸味臭はビネガーのようであり、烏賊臭さほどのきつさはないものの、やはり二十五歳の女性を震わせる臭気だ

えっちシーン試し読み
SSSから入ろう！

った。ジン、と身体の奥が熱く疼く。

ピンク色の舌を差し出す。ぺろりと舌先で亀頭の滑らかな曲線を舐めおろしていく。ピリ、と舌にしょっぱさが感知された。見れば、鈴口から透明な粘液が潤みだしている。

「くひひ。久しぶりの女の舌はいいなぁ。もっと舐めなさい。アイスキャンデーを舐めるみたいに。今まで散々いろんな男のちんぽを舐めてきたんだろう？」

「そ、そんなこと、ありません」

「すぐに否定するところが怪しいな。どうせ今時の女だから、遊びまくってきたんだろう？」

佳奈子は瞼を薄閉ざしにし、亀頭の頂点からカリ付近までを舐めおろし、舐めあげ、舐めおろし……という運動を繰り返していった。舌に染みる塩辛さはなおさら濃さを増してきている。舌をゆるり、と亀頭円みを包むように回し、再び鈴口に吸いついていく。鼻奥に強い烏賊臭が突きぬけていく。

「ふほほぉ……。気持ちいいぞ。佳奈子さん、カリもねっとりねぶってくれ。……おお、そう、そうだ」

頭上で声が上ずるのを耳にしながら、佳奈子はカリ首のチーズ臭さに眩暈を覚えていた。恥垢だろうか、それとも、ごく自然な牡の匂いなのだろうか。不快感もあるにはあったが、どこか陶酔してしまっている自分を感じる。

（最悪のところまで行かないためには、こうするしかないのよ。大丈夫、わたしはおかしくなんかなっていない。全部気のせいなのよ）

脳髄のどこかが熱く火照ってきている自分を必死に否定しつつ、カリを念入りに舐め、再び亀頭に柔舌を這わせていった。

じゅ、じゅず、ずず、れろ、れろろ、れろろん、れろろろん。じゅるぅ。

右手指はいつしか輪っかを作り、硬幹をホールドしていた。そして、緩やかに上下シェイクしていた。自分でも意識しないうちに行っていた動きだった。

「よし。竿のほうもだ。うひひぃ。たっぷり牝として仕込んでやるからな。おおっ」

薄褐色の硬い老幹に舌を何度も這わせる。根元まで降り、またカリまであがり……をリピートする。右手は亀頭肉を包んでおり、指を細かく動かしては、高熱快感を義父に与える。我慢汁もあり、ねちゃねちゃとおぞましい粘り音が響く。

「さあ、そろそろ本格的にしゃぶってもらおうか」

「本格的にしゃぶる……？」

「そうだ。口でちんぽを咥えて、舌をつかって舐めたり吸ったりするんだ。万引き女の腐った性根を叩きなおしてやる」

幸三の目が暗く光った。口の端が吊りあがり、前歯の欠けた様子が窺（うかが）えた。

（ああ、どこまでわたしを苦しめれば気が済むのかしら。……でも仕方ないわ。最後まで

やるしかないのよ）

そして……。佳奈子は亀頭円みを含んでいった。じゅくん、と蜜所が熱くただれていた。自分でも信じられなかった。

（いやなのに、悔しくてしょうがないのに、どうしてなの……）

亀頭から、カリ首、そして肉幹までを口内に収めていく。

（脈打っている……。六十代でこんなに硬くて太いなんて。何か薬でも飲んでいるのかしら）

そんな様子は窺えなかったのだが……。歯を立てないように注意しながら、佳奈子は義父幹を吸いを始めた。唇を締め、じゅ、じゅ、じゅるるる……と唾液をまぶしつつ吸っていく。

「お、おおっ。いいぞ、佳奈子さん。素晴らしい。さすがは淫乱牝だなっ」

（いや、そんな言い方……。なんていやらしい言い方をなさるの）

強い羞恥に頬が火照る。

じゅ、じゅ、じゅる、じゅるるる、じゅずず、じゅるるん、じゅるるん。

ゆっくりと首振りを加えながら、剛幹半ばまでを含み、しゃぶりたてていく。舌もごく自然に動き、カリと幹の裏側を舐めまわしていく。特に裏面がいいようで、「おおう」と喜悦の声を弾ませる。

「くひひ……。佳奈子さん、すごくいやらしい顔になっているぞ？　鼻の下伸ばしてなんと下品な顔だ。カメラで撮ってやりたいくらいだな」
（いやっ。絶対にやめて下さいっ。そんなことをしたら、一生残ってしまう）
義父の手が佳奈子の豊満乳に伸びてくる。もみもみ……と十本指と掌底で柔らか乳をもてあそぶ。武骨な指に、優雅な円み乳は平たく歪み、指からミルク色肉が零れだしてくる。指と指の間から、勃起乳首がこんにちはをする。
（あ、ああ、やめて、胸が……おっぱいが感じちゃうっ。ああ、いやなのに、変になっちゃう）
じゅぶじゅぶと唾液音、吸引音も高らかに、牡幹吸いは加熱していく。早く射精させ、おとなしくさせようという思いも当然あったが、同時に熟れはじめた女体の奥から淫欲がこみあげてきていた。
（わたしの身体、どんどんおかしくなってしまう。あなた、助けてっ。お義父さんにおかしくされちゃう）
蜜所が潤んでいる。じっとりと蜜汁が分泌されて、ショーツを濡らし、薄生地が恥丘に貼りつく有様である。女豆も勃起し、パンティ生地に擦れては、ビリリ……と軽い性感電撃に見舞われる。
「ほれ、ふぐりも指であやしなさい。そう、そうだ。かわいいもんだろう。いつか、ここからこってり濃い汁を佳奈子さんに注いでやるからな」

その言葉に、頭がくらくらした。絶望、怒り、悲哀、いや、それだけではない。どこかで喜んでしまっている。期待している自分がいる。臭くて熱い欲望汁を子宮に注がれる、その日を夢見る自分がいる。

（馬鹿なことを考えちゃだめ！　この男は悪魔なのよ。強制わいせつ犯なのよ。絶対に、絶対に許しちゃだめ。絶対に……）

万引きの事実が明らかになっても、この鬼畜義父の所業を夫に明らかにしたほうがいいのではないか。いや、そんなことをしたら、夫の会社での立場が怪しくなってしまう……。毎日研究に明け暮れ、頑張って新薬開発に打ちこんでいる幸彦の努力が無駄になってしまう。夫婦仲も悪くなるかもしれない。

（もうどうすればいいの？　もう元には戻れないの？）

悲しみに目尻から涙がひと粒溢れて流れていく。

その間も乳首をコリコリ指でいじくりまわされて、感じはじめてしまっている。乳首の奥、胸乳の芯から、ぐんぐん甘く切ない愉悦波動が湧きあがってきている。その熱感は脊髄にまで通じ、さらに、子宮奥から溢れてくる秘めやかな温感ともミックスされて、若くうるわしい肉体を翻弄（ほんろう）しはじめている。

首振りをするたびに、身体が微妙に上下し、パンティにクリトリスが擦れてしまい、鋭敏なる性感刺激が弾けていく。まだ堪えられる範囲であるが、これからどんどん刺激が強

くなったら、どうすればいいのか、不安で仕方がない。
「うう……そろそろ出るぞ。佳奈子さん、ちゃんと飲むんだぞ。いいな？」
義父の老腰が上下に揺れはじめる。のど付近にまで亀頭がつついてきて、えずきそうになる。必死に耐え、佳奈子は唇をすぼめ、亀頭を甘吸いする。
じゅ、じゅ、じゅる、じゅるるる、じゅる、じゅずず、じゅるる。ぬちゅ、ぬじゅう。れろれろれろん。じゅるるるるぅう。
根元を右手指で包み、数センチ間隔でしごきたてる。そうしながら、柔らか舌をローリングさせ、亀頭を吸い、優しく舐め、また強く吸い……と繰り返す。
「くおおおお、イク、出るぞ、ぶちまけてやるぞ、佳奈子ぉおおおお」
どぴゅ、どぴゅぴゅぴゅ、ぴゅるるるるぅううう。
「ん、んじゅ、ぐぐ……ごく、ごく、ごくん。……んん、熱いぃ」
（熱い！　なんて熱さなの？　これがお義父さんの精液……。しかも、量もすごいわ）
のどにまでぶちまけられ、佳奈子は眉間に縦皺を刻み、鼻筋にも薄く皺を寄せて、小鼻を膨らませながら、烏賊臭く、生臭く、塩辛くてほろ苦い牡汁を飲んでいった。
「ふぅ……。最高だったよ、佳奈子さん。スケベな口ま○こだった」
口端から溢れそうになる白露を指でぬぐいながら、佳奈子は義父を睨んだ。じゅくん、となおも愛蜜が溢れだしてくる。中途半端な状態で女の肉体は火照ってしまっている。理

性では悪魔に抗いながらも、身体は牡を求めてしまっている。
（あんなことをされて、いやなのに……、どうして身体は感じてしまうの？　わたしは本当に淫乱なの？　元からこんな女だったのかしら）
思わずしゃくりあげ、涙をぬぐいながら、佳奈子はブラジャーとブラウスを身につけていった。

「いやあ、すまないねえ、佳奈子さん。面倒かけて」
義父の言葉に、佳奈子は何も答えることができない。
ここは浴室。今、義父はプラスティックの椅子に腰を下ろし、こちらに背を向けている。佳奈子は豊満な女体にボディソープをたっぷり塗り、自らの乳房で義父の背中を洗っているところである。
八月もそろそろ中盤に差しかかりつつある。その間も、なんやかんやと呼び出され、義父のもとを訪れていた。本当に悩み、苦しみ、いっそのこと、誰かに相談しようかとも思ったが、適当な人物はいなかった。
セクハラは続いていた。なんとか口で欲望を解放させ、最後のセックスだけは防いでいたが、それもいつまでも続く手ではない。一体どうすればいいのか、考えぬいたが、いい案は浮かばない。

いきなり、乳首を吸われた。きゅーんと熱く切ない愉悦熱が生じ、広がっていく。「ああ」と甘い声を漏らし、息子の嫁は首をのけぞらせる。首に浮いた筋肉の筋に薄い影が揺らぐ。朱のふっくらとした果肉唇が引き締められるが、そこから艶っぽい声が漏れてしまうのは抑えられない。

右の乳首、左の乳首と交互に吸い、舐め、しゃぶり、今度はふたつの巨房を裾野から支えて寄りあわせ、ふたつの木苺乳首を同時に口に含む。

「う、あ、あ、や、やん、お義父さんっ……」

ビリ、ビリリ、と鋭い悦感が弾ける。ぐんぐん熱は温度を高めていき、二十五歳の女体を火照らせていく。義父の痩身の下で、たおやかな肉体がうねる、泳ぐ。す、と膝を立て、桜貝のような爪をシーツにうずめる。手指はいつしか義父の背中に回されてしまっている。

（あ、ああ、感じちゃう。いやなのに、つらいのに……。あのひとと全然違う）

ただただ恐ろしい。このままでは、本当に義父の性奴隷に堕ちてしまう。

散々乳首を唾液まみれにしてから、義父は顔をあげ、笑った。

「さて、今度はおま○こだ。牝っぽく発情した淫乱ま○こをいじくってやるぞ」

「そんな言い方しないで下さい。もうやめて……」

眉を「八」の字に垂れ下げて、瞳を潤ませて、佳奈子は懇願した。

しかし、容赦しない。義父はショーツを下ろし、露わになった蜜所に口づけていく。い

ページ読み放題 ちらら

きなり激しい舐め技が展開された。赤紫色の肥大したラビア肉を含み、ちゅうちゅう吸いながら、右手の中指は女豆を優しく転がしている。

「く、う、うう、ああ、あん、い、いや、やだ、やだあ」

ダイレクトに刺激は快感になって子宮にまで響く。じゅくん、と愛蜜が溢れ、はしたなく秘裂がうごめいた。太腿がぷるる……と震え、暗がりにその白さが映えた。

（だめ、だめ、絶対に感じちゃだめなのよっ……。負けちゃだめ、堪えるのよ、佳奈子っ）

しかし、花弁肉を一気に含まれ、しゃぶられ、そこで生じる緩やかな快感と、クリ刺激によって生じた鋭い快感とがミックスされ、高温となって、下半身をとろかしていく。気持ちがいい。たまらない。夫では得られぬ素晴らしい愉悦の波状攻撃に、うっすら汗の粒を無数に浮かせた女体がうごめく。

三分、五分と舐められて、クリ刺激されて、もはや、佳奈子は絶頂に向けて、体温を上昇させている。そこへ舌愛撫が終わり、いつの間にか義父は下半身裸になっていた。

「さあ、お待ちかねだ。ぶちこんでやるからな。くひひ」

「いや、それだけはっ……あ、あああ」

犯されてしまう恐怖に、顔が白くなる。声が裏返ってしまう。しかし、幸三は涎を垂らさんばかりの顔で、鼻息も荒い。歯の欠けた口が見え、舌が嬉しそうに躍っている。

赤灰色亀頭が薄闇（うすやみ）に揺れ、女のスリットを擦る。じゅん、と甘蜜が溢れだし、女豆に触

れると、激しく熱感がスパークする。
「もう逃げられんぞ。佳奈子さんは私のものだ。たっぷりおま○こを味わわせてもらうからな」
正常位のまま、ずぶ、と秘口に肥大亀頭が埋め込まれていった。
「あ、あ、あああ、いや、やだ、お義父さん、抜いて、抜いてぇえええ」
その瞬間、「ううん」と夫がうなり、寝返りを打った。こちらに顔が向く。
(ああ、起きちゃう。だめ、だめだめぇえ)
ぽりぽり頬をかく夫に、佳奈子はパニックに陥っていた。夫に知られてしまう恐怖と、肉膣に感じる太くて硬いペニスへの喜悦に、もはや何が何だか分からない。
ずーん、と脳にまで響くような劇悦に、ウェストが緩やかに左右スイングし、脚は自然に義父の腰に回されてしまう有様である。
(何をしているの、わたしは。こんなこと、絶対にだめ。だめなのにっ)
ずず、と数センチ義父の腰が引いた。そして、突き入れられる。
「あ、ああっ」
一回、二回、三回と前後運動されれば、強烈なる性感電撃に見舞われ、佳奈子は目を大きく開き、金魚のように口をぱくぱくさせ、あられもない声をあげていた。
「あ、あ、あん、お義父さん、いや、あ、だめ、らめぇ。あ、あ、あ、い、い、いい、い

いのぉお」
「ぐひひ。気持ちいいか。そんなにいいのか。たまらんのか。幸彦とどっちがいい？」
「あ、ああ、硬い、です。あのひとよりも太くて……あああ、恥ずかしいっ」
実際、ぼこぼことペニスを這いまわる太い血管が膣襞を擦りに擦り、そのたびに、快感の小爆発が起こる。子宮口を亀頭で叩かれると、骨にまで劇感がエコーし、脳髄にまで響く。
五回、十回と激しい抽送が行われる。性感が腰椎にまで響いては熱でとろかし、身体が気持ちよすぎてバラバラになってしまうような、そんな感覚に、童顔ぎみのルックスがなんとも品のない表情になる。
義父の打ち込みに、メロン大の白乳がぷるんぷるんダンスし、木苺状乳首の揺れる軌跡の残像が暗闇に溶ける。
義父は一旦腰の動きを緩め、幹を半分引いて浅挿しに息子の嫁を喜悦させた。
「上になってみなさい。佳奈子さんが自分でいやらしくケツを揺するんだ」
「そ、そんなこと……あ、ああ」
義父が仰向けになり、自然、佳奈子の身体が上になる。
ズキズキと、子宮口が疼く。疼いてたまらない。もっと牡の突き込みがほしいと、肉膣が蠕動(ぜんどう)してしまう。
（こんないやらしい身体だったなんて……。信じられない。お義父さんの言うように、わ

たしはただの淫乱女だったの？）

一体いつまでこの悪夢が続くのか分からないが、とにかく、毎回早く終わらせること、それだけを考えるのみだ。もし、夫に気づかれたら、一巻の終わりだ。夫婦仲は完全にピリオドを打たれるだろう。

六十五歳の薄い胸板に手をつき、ガツガツと女腰振りダンスをかます。

「お、お、おおっ。いいぞ、佳奈子、くはあ、たまらんっ」

「そんな大きな声、出さないで下さい」

隣で息子が寝ている、その重大な事実を理解していないのだろうか。夫を見やると、再び寝返りを打ったのか、こちらに背を向けている。たまに、髪に手をやるときに、心臓が跳ねあがりそうになる。

一回、三回、五回と上下に腰を振り、ときに円を描くように回す。そのたびに、劇感が子宮にダイレクトに響き、じゅくんっ、と愛蜜を弾けさせ、「ああん」と甘い声を漏らしてしまう。

（早く！　早く出してしまって！）

左手で自らの口を押さえ、喘ぎが漏れてしまうのを防ぎながら、懸命に腰をつかう。ぬらぬらと汗をかきはじめ、しっとりと美白肌が鈍い輝きを放ちはじめる。

「くひひ。佳奈子さんが自分でこんなにケツを振るとはな。よほどのスケベなんだろう。

ぐひひ。幸彦に知らせてやりたいくらいだ」
下から牡腰を突きあげながら、義父が笑った。むんずと左乳膨らみを手指に包み、こねまわす。
佳奈子は涙目になりながら、首を横に振った。
しかし、義父のいやらしい笑みは消えることがない。
「さぞかしがっかりだろうな。自分が抱いているときよりも、よがっているんだからな」
もう一方の手のひらで、バチン、と女尻を叩く。
「ん、んむう」
「ほれ、手で口なんか押さえているんじゃない。かわいい泣き声を聞かせてみろ」
義父の手が佳奈子の手首を掴んだ。
「う、う、ああ、あ、あああ、お、お義父さん……。や、もうこんなの、いやです。……う、うう」
「じゃあ、やめるか？　今ここでやめてもいいんだぞ？」
義父が腰の動きを止め、暗い目つきで息子の嫁を見つめた。佳奈子の細い腰は止まっていない。むしろ、そのダイナミックな上下運動は過激さを増している。
長い黒髪を揺らめかせ、眉をだらしなく垂らし、瞳を潤ませ、目元から頬に薄薔薇色を咲かせて、涎すら垂らし、喜悦に溺れていく。

（いやなのに、悔しいのに、どうして感じてしまうの……？　お義父さんに身体を改造されてしまっているみたい）

きゅーん、きゅーん、と激しい熱感が肉洞をとろかし、子宮口を痺れさせ、骨盤にまでエコーしていく背骨までもが肉悦激流に浸されて、骨の一本一本が甘美刺激に疼いてたまらない。

「くひひ。偉そうなことを言っていても、身体は正直なようだな。もうあんたは私なしじゃいられんよ」

いきなり、義父の突き上げが再開した。途端、強烈な快感激流が女膣から腰を砕き、背骨を突きぬけ、脳天にまで響いて、脳細胞を火傷（やけど）させていった。

「あ、あ、あああああ、お義父さん、あ、あ、い、いい、や、やだ、感じたくない。イキたくないのに。……あ、あ、あああああ、ひ、ひぎ、ひぐぅうう」

涙すら零し、美麗なるマスクをとろかし、佳奈子はがくん、と火照る肉体を倒す。女腰乱舞が続く。止められない。止めるつもりもない。ただただ気持ちがいい。一回一回の義父の抽送に、ビリビリ、バチバチッ……と性感電撃が弾け、ひとつひとつの細胞がスープ状になっていくかのようである。プチアクメに襲われ、口をだらしなく開けて、佳奈子は突っ走る。

「ほれ、イケ。遠慮せずにイケ。ほれほれ、スケベま○こがどろどろになりながら、私を

食い締めてくるぞ」

五回、十回、二十回……。鋼幹突き込みに、とうとう二十五歳の肉体が陥落する。

「ひぐぅうううう、お義父さん、あん、お義父さぁあああん」

頭が真っ白になる。瞼の裏で何度も白光がスパークする。全身が液状化していく。

気がつけば、後背位になり、後ろから硬幹連打を浴びせられていた。薄桃色に女体が染まり、メロン大双乳がブランコのように前後にスイングして乳首がシーツに擦れていた。

「あん、あん、あ、あ、あん、お義父さん、あ、あ、あ、い、いい、あ、ああ、やだ、こんなの、わたしじゃない……。いや、絶対に違うのにぃ……あ、あ、あ」

「またイクか？　何度でもイケ。じじいのちんぽで浅ましくイケッ」

「はうううううううう」

びゅ、びゅびゅ、じゅびゅびゅー。

発情汁がシャワーのように噴き出して、シーツに拳大の染みを作る。むわ、と潮っぽい匂いが立ち込める。

「私はまだだぞ、佳奈子。次はまた佳奈子の顔を見ながらハメたおしてやるか」

身体を反転させられ、正常位になる。

もはや、夫のことも頭にない。鬼畜義父への怒りはあれど、女の身体は浅ましくも、さらなるアクメを求めている。何もかも忘れるくらいの快感がほしいと。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/